

## Information Letter

2003年11月

No.8

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1  
 世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内  
 特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)  
 Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979  
 e-mail : abic@jftc.or.jp http://www.jftc.or.jp/abictop.html  
 【関西デスク】  
 〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室  
 Tel & Fax : 06-4395-1188 e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

## 活動レポート目次

## 海外での活動

ODA関連	1
JICA専門家等	1
NGOへの協力	3
中小企業支援	5
自治体への国際化支援	6
外国企業支援	6
教育	7
留学生支援	10
関西での活動	11

## 国内での活動

## ODA関連

## ● ODAで海外に派遣



前田 喜章 氏



黒川 智水 氏



酒井 邦展 氏



大高 弘太郎 氏



平田 一男 氏

途上国に対する  
日本政府の経済支  
援の一環として、  
JICA（独立行政法  
人 国際協力機構）  
の活動があります。

その中の中小企業支援、地場産業育成等のアド  
バイザーとして、多くのABIC会員が活躍してお  
り、これまでにハンガリー、エジプト、カンボ  
ジア、パラグアイなどに派遣されています。最近では、本年9月にエクアドルへ前田喜章氏（元  
日商岩井）、10月にインドネシアへ黒川智水氏  
(元ニチメン) が、また11月にパキスタンへグル  
ープ派遣として酒井邦展氏（元トーメン）およ  
び大高弘太郎氏（元新興産業）の2名が、また  
ウズベキスタンへ平田一男氏（元三和銀行）が  
赴任されます。

## ● 経済統合の流れの中で

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 専門家  
パラグアイ国商工政策アドバイザー

佐藤 一雄  
(元 三菱商事)



なぜパラグアイはメルコス  
ール（南米南部共同市場）に  
加盟したのだろう。設立後20  
年を経てASEAN10の1.5倍の  
GDP (8,000億ドル) に成長した共同市場の中で、  
パラグアイは経済不振に喘いでいる。伝統的一  
次産品へ依存した産業は市況に左右され、域内

共通関税下でブラジル、アルゼンチンとの競争  
は厳しく、メリットを見出しつらい。経済地域  
統合への趨勢は避けられないが、厳しい現実で  
ある。

かかる情勢下、独立行政法人 国際協力機構  
(JICA) より当国商工省に商工政策アドバイザー  
として派遣され一年になる。非伝統品の輸出強  
化、車両産業育成、輸出保険制度創設、産業環  
境規制、マキラ活動支援、中小企業育成支援等  
と期待される政策メニューは多岐に渡る。民間  
企業から政府機関の立場に変身したが、永年の  
商社勤務を通じて得た様々な産業との接点や、  
営業から管理までの経験を応用できる分野は多  
い。カウンターパートから出てくる抽象的な施  
策を、ビジネスの観点から実践的なシナリオに  
書き直す作業に大いに役立っている。

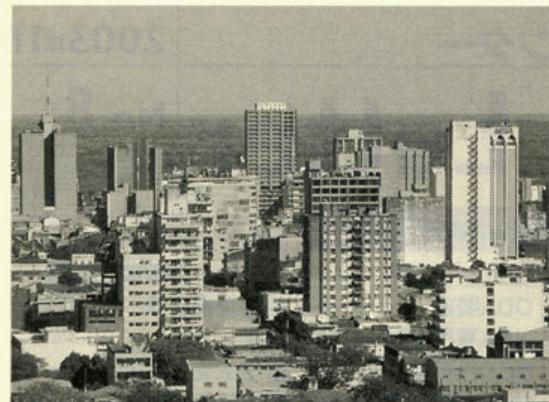
経済協力 (ODA) も具体的成果を求めて  
いる。プロジェクト目標や成果を設定し、これ  
を経済、政治指標に結び付けて評価する技法は、  
実態が把握し難いだけに悩ましいものがある。  
これに比べ、利益と企業価値付加の達成という  
企業ルールは、厳しくも、具体的財務諸表や株  
価に示される万国共通のデジタル言語であり、  
優劣勝敗のはっきりした自浄作用は潔いものと  
映ってくる。

この8月より発足したドゥアル  
テ新政権への期待は大きい。國  
家支出の再編成、税源微収の強  
化、公務員の削減、金融機関の  
統合と整理、経済活動の正規化、  
透明性の向上、司法機関肅清な  
どを目指している。何よりも國  
内、国際的な信用を取り戻す原  
点から出発し、投資を誘引し、雇  
用を確保して貧困から脱却する  
必要に迫られている。また、比較  
優位の見出しつらい産業を抱え  
た内陸小国にとって、政治的対

## 海外での活動



パラグアイの首都  
アスンシオンは  
人口50万人の  
近代都市



外折衝の成否はこの国の運命を大きく左右する。

地方に出張すると、都市化した首都アスンシオンとは異なり、地平線まで見渡す限りの大草原や、牧草地に圧倒される。改めて、この国の原動力は豊かな大地に支えられていることを認識させられる。

なぜパラグアイはメルコスールに加盟したのだろう。将来の産業構造の変革を見据えた舵取りが如何に重要か、自由貿易協定の大きな流れの中で苦慮している日本と置かれた状況は異なっても、重なって考えさせられることは少なくない。

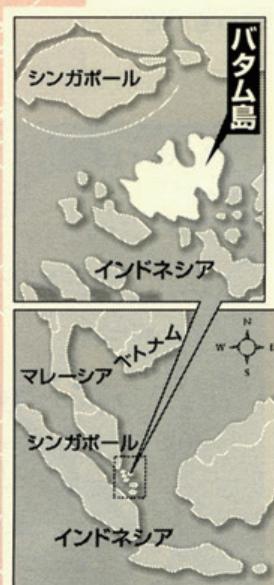
## ● インドネシア・バタム島での投資誘致活動

JICAシニア海外ボランティア  
投資促進アドバイザー

さわだ しゅうご  
沢田 修吾 (元 丸紅)



オフィスにて



丸紅を定年退職後、JICAシニア海外ボランティアに応募、選考され、2002年4月ジャカルタで研修の後、5月に投資促進アドバイザーとしてインドネシア共和国リアウ州バタム島にあるバタム工業開発公社（BIDA：Batam Industrial Development Authority）に配属され、今日に至っている。任期を来年4月1日に控え、これまでの当地での活動の概略を紹介したい。

まず、バタム島をご存知の方はどれほどおられるだろうか？バタム島はシンガポールからマラッカ海峡を隔てた東南へ20キロ、フェリーで小一時間の工業地帯と観光リゾートが共存する人口54万人弱、大きさが淡路島の3分の2位の活気のある島である。インドネシア領であるがシンガポール経済圏に属しており、通貨もシンガポール・ドルとイ

ンドネシア・ルピアの両方が使われている。1971年にインドネシア政府により設立されたバタム工業開発公社が工業、貿易、観光および港湾輸送の開発・促進を行う行政当局としてバレン地域（バタム、レンパン、ガラン、ガランバルの4島）のすべてのインフラ開発の企画、遂行ならびに管理を行っており、2003年8月までの外国投資許認可数は累計で651社（35億4,500万米ドル）に達している。

BIDAには日本から初めてのシニア・アドバイザーとして派遣された。主要業務は日本およびASEAN地域の日系企業のバタムへの投資誘致で、新規投資家に対するバタムの投資機会・環境のプレゼンテーションと、BIDAに対する投資の整備・制度の改善のための助言およびバタムで操業中の日系企業とBIDAとの間の調整業務を行っている。

バタムを訪問する日本、シンガポールなどからの投資視察ミッション（約25～50名）とのセミナーではBIDAとのMOU（覚書）調印を行い相互の関係強化を図る一方、工業団地（現在17団地完成）と日系企業訪問を実施している。また、JETRO、BKPM（投資調整庁）と連携してシンガポール、ジャカルタに遠征し、セミナーを企画・開催している。その他少人数のバタム訪問客にもビデオとプレゼンは必ず実施し、投資の具体的手続きやコンサルティングはもちろんのこと、日本人には補足資料として日本語版投資ガイドブック等を作成、配布している。

日系企業との kontakt はバタム日本人会（法人43社・183名と個人13名）に個人会員として入会し、企業訪問や毎月の日系テナントミーティングに出席して情報交換に努めるとともに、ゴルフ、その他の行事で親睦を図り、常に日系企業の動向調査および問題点を分析し、BIDAにフィードバックするよう努めている。

さて、全島が本年末まで保税扱いとなっているバタムについては各種の投資優遇策（輸出入税、付加価値税、奢侈税の免除等）があり、投資家を保護する一方、シンガポールに限りなく近い立地、土地の有用性、豊富な労働力、ほぼ完備されたインフラ、安い投資コスト等を大きな利点として、中規模の製造業、特に労働集約型の部品組み立て産業（電子機器、電器部品、プリント基板、自動車部品等々）が最適の産業として成長しており、松下、サンヨー、エプソン、住友電装等日系企業50社が操業を続けている。

現在、バタム島を自由貿易地帯にする法案（FTZ法）がジャカルタ中央議会で審議されており、本年末までに可決されれば投資誘致に強力な武器となる。さらに、国際的なリスクの格付

BIDA別館の前で  
マーケティング・  
マネージャーの  
ノビアンタ氏（右）と  
彼は3年間長崎大学に  
留学した

けを行っている香港の政治経済リスク・コンサルタントの調査の結果、バタムの格付けがシンガポール、マレーシアに次ぐアジア9ヵ国中第3位（インドネシアは9位）の評価を得ていることからもバタムの投資環境の改善は着実に進んでおり、観光分野への投資の期待も極めて高く、BIDAも観光開発の促進に注力している。

一口に投資誘致と言っても短期間に成果の挙がるものでなく時間と忍耐を要する仕事であり、昨今の直接投資の減少傾向と中国一極集中傾向を何とか打破すべく最後まで精一杯の努力を惜しまぬつもりでいる。

## NGOへの協力

### ● NGO「地雷除去支援の会」に参加して

人道目的地雷除去支援の会 シニア・アドバイザー

かとうともひろ  
加藤智弘（元ニチメン）

地雷除去を民生技術・資材面で後方支援をしているNGO「人道目的地雷除去支援の会（JAHDS）」のシニア・アドバイザーとして2002年4月に参加した。それからおよそ1年半、スタッフは倍増、その活動も自から地雷除去をする直接支援に進出、日本で唯一西欧の先発NGOに伍して活躍する特異なNGOとしてメディアの露出度も急増している。

JAHDSは1998年に発足、翌99年9月に特定非営利活動法人の認定を受けた若い団体である。セコム、トヨタ、ホンダ、ソニー、日本IBM、オムロン、東京電力など、日本財界のトップ企業の重鎮たちがこの小さなNGOを応援している。JAHDSはその名称どおり除去支援であり、われわれが防具を付けて地雷探知したり、除去をするなどの危険な作業はしない。除去員は地元の人たちが原則で、その労働が彼らの生活を支える職業にもなっている。

金属探知機は戦前に開発されて以来、同じ原理のものが世界各地で使用されているが、地雷は改良を重ね小型化・軽量化が進み、金属ケースがプラスチックに変わった。爆破力も強化され、仕掛けも驚くほど巧妙、その種類は350を優に超えている。金属探知機は形状に関係なく、あらゆる鉄分に反応してその存在を音で知らせる。重装備で30分、緊張作業を続けたあげく、たどり着いたのが釘一本といった激務は日常茶飯事。実際にJAHDSが関わったカンボジアの地雷原で、104,440回掘ってめぐり会った地雷は2,777個という記録が残っている。

現在世界の71ヵ国に7,000万から1億2,000万個は眠っていると推測される。しかし、現在除去



BIDA  
MARKETING CENTRE



海外での活動

地雷除去作業  
模擬体験中の筆者

されている地雷数は年間10万個程度にすぎない。一方でアフガン、イラクなど紛争ごとに新たな地雷が埋められている。埋没地雷の全面撤去が「千年単位の仕事」と言われている所以である。

国連の要請により97年、JAHDS支援企業の数社が協力して、材質にかかわらず地中物体を特殊モニターに三次元で映し出すという世界初のレーダー式地雷探知機を完成させて「マイン・アイ（地雷探査の眼）」と名付けた。これが小渕外相（当時）の目にとまり、同年の対人地雷禁止条約（オタワ条約）締約国会議で「日本は地雷除去に技術面より支援する」旨の提言につながった。翌98年、民生技術を結集して国際協力するという世界に類を見ないNPO「地雷除去支援の会」が誕生したのは自然の流れであった。

マイン・アイの開発と並行して、支援企業から四輪駆動車、悪路対応二輪車、洗浄用高圧ポンプ、発電機等、各社製品の寄贈を受け、カンボジアとタイの現場部隊に支給する支援を開始。



マイン・アイおよび  
地雷犬を使った  
オペレーション

続いて日本政府の他、助成団体、新規企業などドナー層の幅を広げ、支援金で金属探知機、防具、備品、救急医療キット等を調達。さらに昨年は日本政府の助成を得て、日本IBM、オムロン、ジオサーチの技術者がマイン・アイの操作技術を半年にわたってタイの除去チームに教育する「技術移転プロジェクト」が昨年秋に終了した。実際に地雷原で100種以上の技術データを採取するとともに、マイン・アイの汎用化に向けて一歩踏み出した。

参加後最も燃えたのは、目下タイ、カンボジア国境で終盤を迎えるタイ王国の歴史的文化遺産「サドック コック トム寺院 (SDOK KOK THOM : SKT) 地雷除去プロジェクト」である。SKTはアンコールワット風の石造建造物で、アンコールワットより100年ほど古い1052年に建立された。敷地面積はサッカーコート60面に相当する50万m<sup>2</sup>ほどある。クメール遺跡としては小粒な部類であるが、1930年代に歴史上極めて貴重な2柱の石碑が発掘されたことで、SKTの名前が一躍世界中に知れわたった。

地元民の精神的な拠り所でもあるSKTは、70年代のタイ軍とクメールルージュとの戦闘時に多数の地雷が埋められ、また長年にわたる自然崩壊に加えて、紛争時、中央聖堂をはじめ経蔵、塔門、外壁等が人為的に著しく破壊された。戦闘終了後、地元民、歴史家、宗教家、教育家、メディア等が中央政府に早期修復を再三訴えるも、予算不足を理由に長年放置されたままであった。2002年初めにやっと資金目処がついて、タイ文化省による修復作業が開始した矢先、作業員が対人地雷を踏んだ。即刻撤去をタイの政府系地雷除去センターに要請したが、同センターは農耕地帯の地雷撤去に手一杯として、修復作業は再び暗礁に乗り上げてしまった。JAHDSに参加してひと月目の昨年5月、初めて訪れたSKTはまさにこのような状況の中にあり、村人の嘆きと再生への夢をじかに見聞することになった。

日本からの支援で何とかならないか、SKTを眺めながら同行のJAHDS事務局長と話しあい、次期プロジェクト案件とすることがその場で決まった。いったん東京に戻り、とんぼ返りして6月に再度現場入りした。総予算額約2億円、期間1年、除去面積40万m<sup>2</sup>、除去員数30名、地元NPO、政府系除去センターとのタイアップなど、地元の希望が強いだけに、事業案が纏まるのに多くの時間は要しなかった。命を張って指揮をとる現場監督は国連タイ事務所の紹介で、南ア

国軍出身の逸材が見つかり、契約翌月の10月に現場入りしてもらった。タイでは5月ごろから半年の間雨季になる。雨季には作業能率が半分に落ちる。乾季に除去面積を稼がねばならない。他方、東京本部では必死の努力にもかかわらず資金調達がはからざらないなか、現場ではすでに雨季が明けて好天が続く。しかし、金属探知機一本買えない。本部に泣きつき、とりあえずの軍資金が振り込まれた。調達した新品の防具に身をかため、除去員が地雷原に踏み入ったのは予定よりひと月おくれの12月2日であった。除去員は計画の半分に満たない14人、草刈機もなくすべて手作業での悪戦苦闘のなか、チームは一体となって黙々と働いた。

今年2月、タイ除去センターが自前の地雷犬、植生伐採機、プロの除去員5名をやっと現場に送り込んでくれた。3月に日本外務省のNGO支援無償資金7,700万円が決まった。理事企業はじめ、民間からの支援金振り込みも日ごとに増え、タイ正月明けの5月には、待ちに待った日本製大型重機が到着、除去員も50人に増員して、現場はにわかに勢いづいた。日中の暑さに弱い地雷犬は朝6時から地雷原を嗅ぎまわる。重機がごう音をたてて灌木を切り倒す、砂埃が舞う。晴れ間の青空と鬱蒼とした樹木の緑、赤土の地雷原で黙々と作業する除去員の青い防具の胸にJAHDSのロゴが白く浮かび上がる。

5月7日、外務省傘下の実行委員会から「日本ASEAN交流年2003記念事業」に選ばれた旨の報告が届く。初めての、それも特殊なNPOのスタッフとして参加してわずかひと月足らず、何もわからないまま、国連、軍組織、官僚、在外公館、地元NPOなど商社時代には全くなじみのない相手との交渉で、暑い盛りバンコク名物の渋滞道路を這いずり回った半年前が遠い昔のように思い出される。相手と話はついたが金がつかない、JAHDSの事業として早すぎたか、資金目処がつくまで延期するか、など悩んだ苦労がウソのようだ。目の前でフル稼働で展開している光景に興奮し、やはりこの事業に取り組んで良かったとの感慨が込み上げてくる。

地雷の危険から解放された本堂周辺では、10トンクレーンが持ち込まれ、われわれの除去作業を横目で見ながら、修復作業は一段と加速し、本年末予定の地雷撤去完了を待ちきれないといった様子である。危険地帯を警告する赤い「どくろマーク」が外された前庭では、物産展・ミスコンテスト等の催事やピクニックを楽しむ多くの地元民が集まるようになった。遺跡見学・写生会の学童グループも増えてきた。土産物屋、ウドン屋台等のパラックが瞬く間に軒を連ねた。



新しい観光掲示板、案内パンフ、泥道のアスファルト化など、自治体も負けじとばかり観光客誘致に大忙である。3~4年後には、案内所、ホテル、レストラン、ギフト店等が立ち並び、周辺の様相は一変するに違いない。事業目的のひとつであった地元経済の活性化が、日々見える形で実現している。

去る9月15日から5日間、アジア初のオタワ条約締約国議会議がバンコクで開催された。前夜祭の14日、現場視察イベントとして参加者800人のうち250人がバンコクから4時間かけてJAHDSの現場に来てくれた。タイ王女列席の開会式では、NGOによる新たな挑戦として、われわれのプロジェクトが136カ国政府代表の前でビデオ紹介された。会場入り口の好位置に日本から唯一のスペースを提供されたJAHDSブースには各国代表が立ち寄り、人集りが絶えなかった。世界



急ピッチで進められる  
寺院の修復作業

から地雷関係者が集う年一度の大舞台で、鮮明な「日の丸」と現場で共に汗をかく(Boots on the Ground)日本のNGOを少なからずアピールできたと、にんまりした一週間であった。今は日本に戻り、来年の事業を仕込み中である。機会があれば更に躍進したJAHDSを紹介したく思っている。

## 中小企業支援

### ● コーディネートされた コーディネーターの初体験

外国企業支援コーディネーター

さちみち とよひこ  
**大道 豊彦 (元 住友商事)**

「外国企業の日本進出支援担当」のコーディネーターということで、私は日本で開催される見本市への出展や日本企業との商談のために来日する外国の会社に対し、ABIC活動会員の中から適任者を選んで通訳として紹介する仕事をしている。

その私が別のコーディネーターにコーディネートされ、群馬県にある小企業のアドバイザーになって1年が経つ。この間、同社が開発したユニークな脈拍計の対米輸出を実現するため、格安報酬にもかかわらず、ABICの名に恥じない働きをしてきたと勝手に思っている次第。

まず、ディストリビューター(販売店)を募集すべく、各種資料から洗い出した数十社に手紙を出し、反応のあった先にサンプルと希望契約条件を提示したうえで、Eメールで交渉を続けてきた。とは言え、製品の評価問題が予想外に



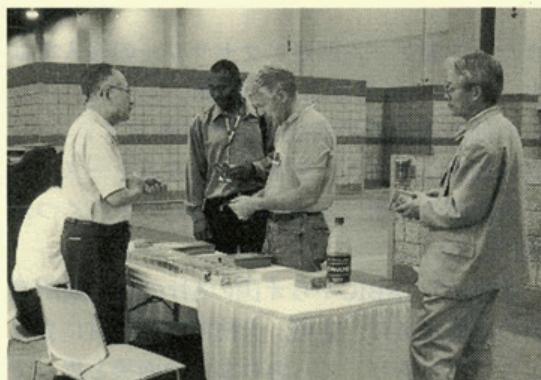
手間取り、販売店はまだ決まっていない。

ともあれ、去る8月上旬、米国コロラド州デンバーの健康機器関係の見本市にこの脈拍計を出展し、社長以



下が行くことになったので同行した。本来、私の役目は販売店候補との契約の詰めにあったのだが、手違いがあって通訳が来なくなつたため、私がブースのアテンダントも務めざるを得なくなってしまったのだ。しかし、このハブニングのお陰で団らぬも、東京ビッグサイトや幕張メッセで活躍いただいているABIC会員の方々のご苦労を初めて自ら体験することができたというわけである。

蛇足ながら、初体験と言えば、エコノミークラスでの出張もこれが初めてなら、米国内線搭乗時に靴もベルトもコンベヤーに載せるよう命じられた結果、裸足のままズボンを押さえながら金属探知機をくぐる羽目になったのも無論、初めてであった。



海外での活動

## 国内での活動



## 自治体への国際化支援

## ● 中小企業の「救世主」ビジネスナビゲータ

東京都中小企業支援センター ビジネスナビゲータ

きよみや のぶお  
清宮 信男 (元 住友商事)

私の名刺の肩書きは、落語の「じゅげむ」を思い出すほど長い。「財団法人 東京都中小企業振興公社（東京都中小企業支援センター）中小企業ニューマーケット開拓支援事業 ビジネスナビゲータ」。この事業は、東京都の2003年度の重点事業の一つとして、石原都知事の発案により「東京都内中小企業を活性化して、東京発信で日本を元気にしよう」との主旨で4月1日からスタートした。

**ABIC会員9名がビジネスナビゲータに：**同公社が大企業のOB 60名を採用して、5班（各12名）に分け、都内中小企業23,000社の中で都が助成金を交付している600社ほどの優秀な製品、高度な技術力を商社・メーカー等に積極的に紹介することにより、新しい販路先の開拓を支援するものである。60名のビジネスナビゲータ（以下BN）は大手メーカーの技術部門・営業部門のOBと大手商社のOBで、ABICからも9名採用された。

**企業訪問：**BNは、東京都ベンチャー技術大賞入賞企業など各種助成金対象企業を訪問して、①開発製品または技術に関わる具体的な取引マッチング支援、②売れる製品・技術にするためのアドバイス等の支援、③販路開拓、技術応用等の相談等を行う。商社OBの私は技術的支援はできないので、メーカーのOBの方とグループを組んで訪問した後、支援対象製品・技術のカタログを作成し、BN全員に配布する。それぞれのBNは人脈を活用して、販路開拓に努める。すでに200件以上のカタログが完成した。それぞれの中小企業は優れた技術・新製品を持っているが、営業・販路開拓のための担当者が不足している。中には社長1人、従業員0名で、訪問



班定例会議



製品説明会

しても座る場所もないような自宅兼工場という会社もある。

**班定例会議、製品説明会：**各班は毎週1回、定期会議を行い、訪問した支援対象企業の新製品・新技術等の情報交換、販売へ向けての改善点や具体的販売先の開拓等の検討、公社事務局との情報交換等を行っている。

また、支援対象企業の中には担当者に公社会議室に出向いてもらい、その社の製品説明をしてもらう場合もある。この説明会はすでに70回ぐらい開催されているが、毎回BNが30名程度参加して、熱心に意見交換している。新製品・技術に対する知識不足の私には、大変勉強になる有意義な製品説明会である。

**グループウェアソフト「サイボウズ」が大活躍：**ニューマーケット開拓支援事業では、グループウェアソフト「サイボウズ」を導入している。自宅と公社のパソコンのネット上で、スケジュールの管理や企業訪問の報告、BN同士の意見交換等に活用している。BN 60名および事務局との連絡はすべてネットで行うので、昼も夜も週末もパソコン相手に、現役時代よりもよく働いている。また企業訪問などで電車を利用するので、駅の階段の昇り降りで脚が相当鍛えられたとうれしい悲鳴を上げているBNもいる。

任期である来年3月末までの残された月日を、BNたちは東京都の中小企業支援のため「救世主」となるべく日夜頑張ることであろう。

## 国内での活動

## 外国企業支援

## ● IT関連の通訳業務に携わって

うるしざき りょうじ  
漆崎 隆司 (元 ニチメン)

現役時代にIT関連の経験があるということで、ABICから幾つかその分野の活動の機会を頂いている。ゲームソフトの輸出に関する相談では知的財産権をどう守るかを中心に助言し、

また中国製ゲーム関連アクセサリーの輸入ではキャラクター所有権者との橋渡しなどを行った。その他外国企業の商談通訳や展示会アテンド、資料翻訳など様々だが中でも、在日オーストリア大使館の依頼によるものが多いのでいくつか報告したい。

本年5月にABICからオ国のA社の商談通訳業務の募集があり、応募。大使館の商務官に会うよう指示があり、てっきり事前の面接と思って

出向いたところ、この会社の製品が何なのかと質問され、即活動開始であった。製品は携帯電話などに使われるDSP（Digital Signal Processor）用の組み込み型C言語コンパイラーで、NEC向けにA社が開発した技術が元になっている。既にドイツの半導体大手他に納入実績があり、日本市場を開拓すべくEUのIT関連ベンチャーの訪日ミッションに参加来日したもの。通常IT関連の専門用語は英語であり、面談者同士は専門用語を並べるだけである程度意思の疎通が図れるものだが、ボランティアとは言え有料サービスとなるといい加減な事もできない。A社の会社案内書やホームページを読み、専門語の意味も日英で頭に叩き込んだ。昔の一夜漬け（cramming）である。

一週間の在日中に訪問した大手電機メーカーでは予想通り英語のできる人が応対してくれた。特にS社では日本側5人全員が英語に堪能で通訳の出番はほとんどなかった。ただ会議の内容を十分理解し会議中の日本側の雰囲気とか本音の部分を観察し、製品購入の可能性の有無などむしろ今後の戦略的な展開についてのアドバイスをするのが活動の中心となった。その意味では、事前の準備なしには役目を果たせなかつたと思う。一方、筑波大学では電子情報工学のW教授を訪問し、コンパイラーについて意見交換を行った。また、研究室の学生から分散トランザクション処理に必要な高速通信に関する研究成果の説明を受け、たいへん興味深い訪問となった。

6月には国際電子回路展に出演するオ国の大特殊鋼メーカーB社の会場通訳。実装技術はハード

寄りで知識はあまりなかったが、これも参考書を買ってcrammingで対応。ところが、折からのSARS騒ぎで展示会は大誤算。来訪者が少ないのでなく、出展を取り止めた数社の小間が空のままという前代未聞の展示会となつた。実はB社の日本代理店がSARSのせいで展示会通訳を断つたために大使館に頼んだとのことであった。

大使館からはIT関連以外の翻訳の依頼もあり磁性木材の特許申請書やFA用制御端末の説明書など多彩だが、図書館の活用などでなんとかこなしている。

IT関連英語の悩みは次々と出てくる新造語や略語である。しかも略語をアルファベットで話してくれれば聞き取れるが、GUI（Graphical User Interface）を「グゥーイ」と発音したり“WYSIWYG（What You See Is What You Get）”を「ウイズィwig」と発音されると略語を知っていても一瞬面食らってしまう。流行の「ユビキタス」も時空自在（国語研）では何の事か判りにくい。活動を通じて感じることは、英語は比較的容易に口から出てくるのに日本語が出てこず、おのれの日本語力のつたなさである。英語を勉強する機会はCNNをはじめ数多いが日本語を洗練する機会は案外に少ない。

ともあれ、近所にある市立図書館の利用度が飛躍的に増すなど、言語中枢と知的好奇心が再活性化しているのを感じている。ただ次々と出てくる知的刺激量に比べ、なにぶん倉庫スペースが少なく在庫の増加を収容し切れないのが悩みだが、それでも何かのお役に立てればと出番を楽しみにしている。

## 教 育

### ● 大学・エクステンションセンターでの講座活動近況

夏休みが終わり、大学は後期の講義を一斉にスタートさせました。講師を務めるABIC活動員たちも教壇に戻り、各大学で熱のこもった講義を開催しております。2003年度は9月現在、延べ31大学（公的機関でのセミナー含む）で、586コマの講義を担当、講師の数は延べ227名に上っています。これらの数字はいずれも前年度を大幅に上回るもので。各コーディネーターはさらに新しい大学などの講座開拓に向けて、積極的に活動を展開中です。

量的拡大は、この3年間大変順調に推移しています。リピートでの講座受託も増えています。問題は質の面です。量の急増と共にこの面のことが気になるところです。ABIC派遣講師の講義は、受講生にどのような印象を与えている



国内での活動

のか。これだけ講師の数が増えてくると、講義内容に質のばらつきが出てくるのは避けられないことのように思われます。

オープンカレッジや各種機関のセミナーなど受講生が社会人の場合、講義中の質問が多く、ディスカッションを取り入れたりするため、講義に対する反響が比較的よく分かります。問題は、圧倒的に多い一般学生を対象とした講義です。受講生が多数の講義が多く、質問を求めて発言する学生は限られていて、講義内容を理

創価大学での講座

解しているのかどうか、面白いのかつまらないのか、よく分からぬ場合が多いからです。

本年度はいくつかの大学で、講義に対する印象を学生に書かせたり、アンケートを取る試みをしました。例えば法政大学・経営学部の各講義では、80%以上の学生が何らかの印象、感想、要求などを書いてくれました。

中には「退屈」「よく分からぬ」といった感想もありましたが、概ね良い内容のコメントをする学生が目立ちました。具体的には、「従来の大学の講義と違ったビジネス現場の話は新鮮で、分かりやすく、面白かった」といった内容のものが多くありました。もっとも同大学の場合、講師が出題、採点をすることになっていたのと、記名式であったため、学生が本音を言いにくい立場にあった点を割り引いて考える必要があるかもしれません。

さらには、大学側の窓口になっている教官にもなるべく講義に出席いただいたりして、ABIC派遣講師の講義を評価してもらうように努めています。それらの方策を通じて、大学講義活動の量的拡大と同時に、質的向上にも努力しています。

(大学講座コーディネーター 布施 克彦)

## ● 小学校における日本語指導の講師活動—内なる国際化

2003年度の活動で目新しい活動は、最近増えつつある在日外国人の小学校編入児童に対する日本語指導を開始したことです。東京都多摩市立教育センターからの依頼と仲介で、現在5つの多摩市内の小学校への講師派遣が成立しました。タガログ語や中国語しか分からぬ児童を6ヵ月間かけて日本語を個別に指導し、学校生活に適応を早めるプログラムで、多摩市が予算をとって支援しています。

先生や親が困っていたのを、それぞれの国に駐在していたABICの会員は気心がわかつており、児童も心を開き、学校生活への適応の効果を上げています。以下、講師の奮闘感想とそれぞれの工夫をご紹介します。多摩市以外にもABICの活用が広がることを念願しています。

(小中高国際教育コーディネーター 藤村 登)

### 多摩市立東愛宕小学校5年

#### フィリピン(タガログ語)児童のケース

花井 真澄(元 三井物産)

S子ちゃんは今年3月、日本に初めて着いた時、日本語は一言も話せなかった。生まれた時からフィリピンのマニラでお祖母さんと暮らしていくためタガログ語と学校で習った英語で話して

いた。目がぱっちりした可愛い11歳の女の子。お母さんはその間、日本で仕事をしていたが、今度日本人の新しいお父さんと再婚したので、3人で暮らすため来日した。

6月に週2時間の講座を始めた時は、すでにひらがなの読み書きは可能で簡単な会話もできるようになっていたが、学校での5年生の授業はほとんど理解できぬいため、担当の先生も苦労していた様子。とりあえずカタカナと漢字の習得から始め、この3ヵ月で2年生の漢字がほぼ完了し、また講座での会話もすべて日本語で行うことができるようになった。

日本語を教えていて痛感したのは、なんと難しい言葉だろうということ。文法や理屈で習うのは子供にはまったく不可能。習うより慣れろが一番と考え、ご両親にお願いし、家庭での会話はすべて日本語にすること(幸いお母さんは日本語に堪能)、また学校ではクラスの皆さんのが進んで日本語で話しかけるようお願いした。本人の性格は極めて明るく友だちも大勢できたようで、この点うまくいっている。週2時間の講座では私のできることは限られているが、学校での先生、生徒、家庭でのご両親の協力をもって、なんとか来年3月までにはクラスメートについていけるようにしたいと思っている。

### 多摩市立瓜生小学校4年

#### 中国(中国語)児童のケース

田内 裕(元 三井物産)

### 1. 日頃どのような指導を行えばよいかの

#### 基本的な考え方

講師の心得—愛情と奉仕：外国人子弟に日本と日本人を好きになってもらおう、日本を正しく理解してもらおう、また将来国際社会で立派に活躍できる人になってもらいたいという、心底強い願いをもって指導にあたっている。これがなんと言ってもABIC活動の最大の特徴であり機能であると確信する。

忍耐と人間関係：外国人子弟は、日本社会では日頃慣れない言葉や習慣に戸惑いながらの生活で、その孤独感や欲求不満はわれわれの想像以上で、このような環境にある彼らにわれわれは常に忍耐をもって辛抱強く接することが何よりも重要。同時に児童と良い人間関係を築くことが大切である。

いかに成果に結びつけるか：一番の問題は、児童により個人差が大きいことである。彼らの実力や傾向をまず認識することから始まり、そのレベルに添った教材の選択や指導方法を独自に考案して実施することが大事である。

「読み」「書き」「聴き」「喋る」の中で彼らが

最も必要としていることはヒアリングの強化とボキャブラリーの増加と思うので、授業中は極力「対話」(会話)を多くするよう努めている。

## 2. どのように指導しているか

注意点：一般的に中国人人は、プライドが非常に高いので、どのようなことがあっても彼のプライドを傷つけることだけは避けるよう注意している。

教材について：彼の日本語力がどの程度なのかを把握するのに大変苦労したが、知識にむらのあることが分かり、体系的な「国語教育」が不十分と判断。初めから（1年生から）復習をすることとした。本人には不満はあったが、教材は民衆社出版の『国語だいすき』を使用し、10月から3年生に入った。また、語彙を増やすため、授業時間の半分は朗読にあてている。教材としては少し難しいが、宮澤賢治の『セロ弾きのゴーシュ』などを使用している。回を重ねるうちに相手がだんだんと飽きてきたり、授業に身の入らないこともあり、どのように授業をすれば良いのか、悩みつつ指導にあたっている。

### 多摩市立北貝取小学校の5年、6年 台湾（中国語）児童のケース

**津田 道夫（元 住友商事）**

最初は、兄妹3人と一緒に指導ということで、能力も性格も異なる3人を集中させることが難しく、これで果たして何がしかの成果を挙げうるものかと、ストレスが溜まる一方であった。幸い9月より進歩の著しい妹を対象から外し、6年生と5年生の兄弟2人だけの指導で、それもひとり1時間ずつに分けての指導となったので、格段にやりやすくなり、手応えを十分感じられるようになった。

2学期の初め、校長先生の計らいで両親との面談の場が設けられ、家庭における日本語の取り組み状況の把握とともに、諸々、両親と率直な意見交換ができたことは大変有意義であった。

学校側は、初めての外国人生徒の受け入れで、当初はかなり困惑の体であったようだが、今で

はむしろこれをテイクチャンスして国際化の一歩としようと、校内の諸々の記事物に中国語を付記するなど、日本人生徒が中国語に日常的に親しめるよう、先生方が積極的に取り組むようになっており、私も大いに勇気づけられている。

## ● 小学校の運動会で ABIC指導のサンバが踊る！

—東京都江東区立元加賀小学校

小中高校で「総合的な学習」という時間が設けられ、各学校が単教科では学べないことを独自のアイデアで授業が行われています。単なる「お話（講義）」だけではない授業をということで、東京都江東区立元加賀小学校からブラジルのサンバのステップ指導のできる講師派遣の依頼がありました。

そこでブラジル駐在経験10年の71歳の宝田登会員を派遣しました。同氏は2年前にある小学校で「ブラジル」の講義とともにサンバのステップを指導した経験者だったからです。今度はその経験をさらに改良し、OHPを使って「ブラジルの講義十サンバ指導」を約100名の3、4年生児童を前に行いました。先生たちはそれに振り付けを考案し、去る9月29日（日）、秋空の下の運動会で、児童全員が宝田さんに習ったサンバを披露しました。

以下に宝田さんの感想文を紹介します。今回のケースはABIC会員の種を先生が創意工夫を加えて、子供達に肌でブラジルを理解させる授業に仕立てあげた共同作業の結実と言えます。

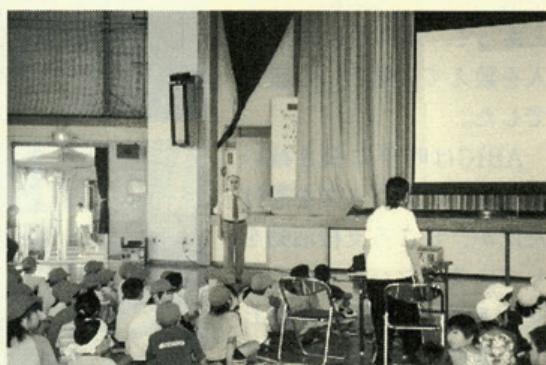
### 教えたサンバで運動会

**宝田 登（元 日商岩井）**

2001年12月に埼玉県飯能市立吾野小学校の3年生から6年生を対象にブラジルの授業を担当し、その中でサンバのステップを教えたことがある。今回は、東京都の元加賀小学校3年生および4年生約100名を対象に「ブラジルの話」と9月28日（日）の全校運動会でのサンバを基調にした踊りの演技のため、サンバを教えてほしい



台湾人兄妹と熊谷校長（右）とともに



体育館でブラジルの講義



フィナーレ決めのポーズ「ブラジルのシンボル太陽」  
それぞれのグループが自分たちのフィナーレを考えて、  
はいポーズ

という要請であった。8月半ば過ぎ、細野コーディネーターから上記趣旨の連絡をいただいた時、これは時間的に難問と感じたが、励ましを受けて取り組みさせてもらった。

事前打ち合わせのため9月3日放課後に学校を訪問（細野氏に同行）。打ち合わせ後、教室で渡辺先生、山形先生、有山先生およびダンス好きの児童数名に持参のサンバ・ステップ図と今年のリオのカーニバル・パレード優勝および2位チームの曲を流しながらステップ数種を速成教授した。これは9月12日（金）の授業本番までにこの日習った人が核になって全員に教えるという先生側の構想であった。

9月12日当日、体育館で3校時（3時限目）に  
ブラジルの講義で、スクリーンにブラジルの動

物、地図、リオのカーニバル・パレードなどの画像を映しながら逐一話を進める形式を採用。児童からの質問タイムには、ピラニア、毒蜘蛛、ヘラクレス・オオツノカブトムシなど動物や昆虫に話題が集中した。

4校時にはサンバの練習でわれわれ（細野、藤村、宇野このか（慶應義塾大学総合政策学部からの実習生。本紙P.12参照）、宝田）は審査員として彼らの猛練習の成果を拝見、出来栄えに感心した。私は1種類だけ簡単なステップを付け加えたに過ぎない。すべて自主的にやらせるようにうまくリードしていく渡辺先生はじめとした先生方には深い感銘を受けた。

後日、生徒全員の感想文を頂いたが、われわれが予想もしない話を記憶しており驚きがあった。講義は画像を中心したことにより児童の集中力は切れないことが確かめられたと思う。ブラジルの印象が深く子供たちに残ったことを感じうれしく思っている。

9月28日、運動会は好天に恵まれ、グリーンとイエローのブラジルカラーのシャツにゴールドのリボンをつけた子供たちのサンバは運動場狭しと展開し、躍動溢れる演技に観衆から大喝采を受けていた。来賓席を辞して校門に向かうとき子供たちに握手せめにあい大感激であった。今後ますますスキルアップしつつこの形式の授業を発展させていきたい。

## 国内での活動

### 留学生支援

#### ● 大学村「交流館フェスタ」に 参加

恒例となった東京お台場の大学村「交流館フェスタ」は今年で第4回目、今年のタイトルは“留学生とふれあおう！'03秋”を掲げて10月26日（日）に開催。当日は快晴に恵まれ、気温も上昇して絶好のフェスタ日和となりました。800余戸からなる日本最大の留学生会館の行事とあって、来場者数は6,800人を数えて大賑わいの盛会でした。

ABICは昨年に引き続いで参加、広報ブースを設けたほか、日ごろ支援活動をしているメンバーを中心に文化教室の成果を披露して、茶道教室は茶会を、華道教室は活花の作品展示と

実地指導を、書道教室は留学生の作品展示を行いました。囲碁、将棋のコーナーにも関心が集まっていました。

しかし、特筆すべきはバザーを開催し、来場者に留学生支援への協賛を呼びかけたことでした。ABIC会員をはじめ日本貿易会ABIC支援委



員会加盟企業の有志、お台場地域のロータリークラブ「レインボークラブ」の皆さんから多数のご寄贈品を受けるとともに、当日の販売にも応援していただきました。ご支援いただきました皆様に感謝申し上げます。

今年はさらにABICの一翼として慶大、早大、芸大の学生諸君が独自の企画をもって参加してくれて「三味線と書のコラボレーション」は大好評、「サルサ」のストリートパフォーマンスは会場の若者を巻き込んで大成功でした。

(留学生支援コーディネーター 山田 雅司)



## 関西での活動

### ● 関西学院大学との共同プロジェクトがスタート

国内外での社会貢献に寄与することを事業目的とするABICと“Mastery for Service”をスクールモットーとする関西学院大学とが相互に連携し、国際理解教育の推進、連携講座、共同研究等を推進することに合意。本年4月から共同プロジェクトをスタートさせました。

学長指定の2年間のプロジェクトとして、代表には学長補佐の木本氏が就任、ABICから9名の会員が参加（大学側からは13名の教授、助教授が参加）、下記3チーム編成です。

#### ① アメリカ研究チーム

アメリカに関するトピックスを扱いながら、その研究成果を近隣の小・中・高等学校の総合学習に提供し、大学、学生、社会人が一体となって国際理解教育の普及にあたる。また、研究成果を大学の総合コースにおける授業にも役立てる。

#### ② 欧州研究チーム

従来、大学の講座ではフランス、ドイツ等国別の授業が開講されてきたが、このプロジェクトでは、海外駐在経験豊富な本センター会員も参加しヨーロッパ全体を対象にした研究とし大学の総合コースに役立てる。ABICからは、クロアチアのザグレブ在住の研究員が参加し（主にメール参加となるが）特に東欧からの視点も対象とする。

#### ③ 中小企業の海外進出に関する研究チーム

ABICが手がけている東大阪市での中小企業支援活動と連携しながら中小企業への経営展開に関する共同研究を行いその成果を提言として纏める。

産学協同プロジェクトは理工系分野で数多く進められていますが、本プロジェクトは人文・社会科学分野における提携として注目されると

## 国内での活動

### プロジェクト本センター研究員

(カッコ内は旧所属)

① アメリカ研究チーム	信
野村哲三（三菱商事）、細野良敦（三菱商事）、松本真司（ニチメン）	
② 欧州研究チーム	
工楽誠之助（松下電器）、峯本晴輝（丸紅）、山本寧雄（ニチメン）	
③ 中小企業の海外進出に関する研究チーム	
藤原照明（丸紅）、中込義雄（住友商事）、赤田堅（丸紅）	
事務局内 担当責任者	
宇佐見和彦コーディネーター	

ころです。また、利益を最終目的とする企業と異なりNPOと学校との連携という点でもユニークなプロジェクトです。本プロジェクトがABICパートナーになる関西学院大学からも評価され、また一般社会からも高い評価を得られるよう育て上げたいと願っています。

(総務・経理コーディネーター 宇佐見 和彦)

### ● 兵庫留学生会館文化祭に参加

10月25日（土）、秋晴れの下、神戸にある兵庫県留学生会館の文化祭に参加し、“活花教室”と“企業人と語る”のコーナーを設けました。当日は関西デスクコーディネーター2名と活動会員6名が参加しました。

活花教室では未生流中山文甫会の田中先生以下3名の先生にご参加をいただき、代表的な活花の展示と活花のデモンストレーションを行い大好評を得ました。数人の留学生が先生の指導で実際に花を花器に活ける体験をしましたが、学生達のあの真剣な眼差しが印象的でした。

他方、“企業人と語る”コーナーは訪問者が期待より少しさびしい結果となりましたが、日本企業人とのアプローチの仕方とか日本企業への訪問方法などについて活発な質疑応答がありました。やり方をもっと工夫して行えば学生諸君の興味関心を引き付けて、彼らの役に立つ支援・協力ができるのではと感じました。



なお、事前にABICの今回のコーナーについてアンケートを居住の学生180人にしたところ、回答が40通返ってきましたので、詳しく分析をして次回に役立てたいと考えています。

#### 事務局便り

#### ● 「高齢者雇用フェスタ2003」に 出展し、ABICの活動をPR

10月6日（月）、東京ドームシティで開催された「高齢者雇用フェスタ2003」（厚生労働省後援、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構〈旧 高年齢者雇用開発協会〉主催）の「高齢者活用企業展示ゾーン」に出展し、ABIC専用ブースにおいて来場者に活動をPRしました。高齢者を活用する企業・組織の事例としてABICに出展の要請があり参加したものです。同フェスタは、高年齢者雇用促進月間の中心行事の一つとして開催されたもので、高年齢者雇用優良企業の表彰、シンポジウム、研究発表会等が行われました。



最後に、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

(関西デスクコーディネーター おおにし としお 大西 稔男)

#### ● 2003年度非営利組織インター ンシップ（学生実習生）受け入れ

2001年度からスタートした慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスからの学生実習生の受け入れは、3回目となりました。本年度は8月から9月中旬にかけて約1ヶ月、宇野このかさん（総合政策学部2年生）にABICの留学生支援、小中高国際理解教育活動や事務局業務の実習を受けてもらいました。



横浜商業高校国際学科1年生向け授業  
「米国の高校生の自立とPROM（卒業パーティー）」  
で講師の助手を務める宇野さん（9月2日）

#### 新たに就任したコーディネーター紹介



##### 関西デスク コーディネーター

大西 稔男  
(元 三井物産)

#### 個人賛助会員

(8月以降ご入会の方)

(敬称略・ローマ字アルファベット順)

〈2口〉 山本 一良\* 和田 稔

\*先のインフォメーションレター7号に掲載の賛助会員  
山本一良氏は、1口会員となっていましたが、2口会  
員の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

〈1口〉 浅香 正美 近野 治夫 前田 喜章 増田 政靖